

卒業率は必修科目の設定に影響を与えるか —入学難易度による差異に着目して—

葛城 浩一（神戸大学大学教育推進機構准教授・
前香川大学大学教育基盤センター准教授）

1. はじめに

大学のユニバーサル化の進展に伴い、大学の入学難易度によって学生の教育・学習経験には大きな差が生じていると考えられる。特にユニバーサル化時代の象徴ともいえる「ボーダーフリー大学」とも呼ばれる、受験すれば必ず合格するような大学、すなわち、事実上の全入状態にある大学は、もはや旧来の「大学」というひとつの概念枠組みでは捉えきれない状況にあるとも考えられることから、学生の教育・学習経験には質的に顕著な差が生じている可能性もある。その可能性を示唆する先行研究の中で特に興味深いのは、学生の教育・学習経験に大きな影響を与えるであろう必修単位数の差に着目するものである。

葛城（2013）は、私学高等教育研究所が学科を対象として行ったアンケート調査に基づき、必修単位数は入学難易度（正確には大学入試の選抜度）によって大きく異なっており、「低選抜群」は「中選抜群」・「高選抜群」に比べ必修単位数が少ないことを明らかにしている。そして、こうした結果が得られた理由として、「低選抜群」は「中選抜群」・「高選抜群」に比べ、就職させられるか、あるいは中退させずに卒業させられるかといった点を教育成果として重視していることが関係している可能性を示唆している。すなわち、入学難易度の低い大学では、就職や卒業が最大関心事であり、最優先事項であるため、その足かせ（障害）となるであろう必修科目を極力設定しないようにする力学が働いている可能性を示唆しているのである。これをここでは「障害除去仮説」と呼ぶことにしよう。

しかし、葛城（2021）は、必修単位数に関する一次資料に基づき、系統を問わずにいえば、必修単位数率（必修単位数を要卒単位数で除した値）は入学難易度（正確には偏差値帯）によって大きな違いはないものの、人文科学系や社会科学系では入学難易度によって大きく異なっており、「低偏差値群」は「中偏差値群」・「高偏差値群」に比べ必修単位数率が高いことを明らかにしている¹⁾。先に示した葛城（2013）とは対照的な結果であることについて葛城（2021）は、葛城（2013）の結果がアンケート調査に伴う「ネガティブな可能性」（例えば、回収率が低ければ、実態を反映した結果からかけ離れていく可能性が高いこと等²⁾を意味する）によって少なからず歪められている可能性が高いと指摘している。こうした指摘は、先に提示した「障害除去仮説」の妥当性を大きく揺るがすものといえよう。それでは、人文科学系や社会科学系では必修単位数率が入学難易度によって大きく異なっており、「低偏差値群」は「中偏差値群」・「高偏差値群」に比べ必修単位数率が高いという結果が得ら

れた理由をどのように考えればよいだろうか。「入学難易度の低い大学では、就職や卒業が最大関心事であり、最優先事項である」ことを前提に考えるならば、そのために必要な手厚い指導を行う機会として、必修科目を極力設定しようとする力学が働いている可能性が考えられる。これをここでは「指導機会仮説」と呼ぶことにしよう。

このように、「障害除去仮説」と「指導機会仮説」は対照的ではあるが、いずれの仮説についても、「就職や卒業」が必修科目の設定に一定の影響を与えているという関係性を想定しているわけである。それでは、そうした関係性は本当にありうるのだろうか。串本編(2021)では、必修科目の設定に影響を与える要因として、教育目的の変数としての「進学率」、学生集団の変数としての入試に係る「偏差値」、教育資源の変数としての教員1名あたりの学生数である「ST (Student-Teacher) 比」を設定して検討を行っているのだが、「就職や卒業」に関係する変数による検討は行っていない。一方、葛城・宇田(2020)は、社会科学系における必修科目の設定に影響を与える要因として、「就職や卒業」に関係する変数である「卒業率」も設定して検討を行っている。その結果、卒業率が必修単位数に有意な正の影響を与えていることから、社会科学系では「指導機会仮説」を支持する結果が得られていることが確認できる。

しかし、葛城・宇田(2020)の結果は、社会科学系に限定したものであることに加え、入学難易度による差異を考慮したものではない。葛城(2021)は、串本編(2021)の分析枠組みに基づき入学難易度による検討を行った結果、同一系統にあっても入学難易度が異なれば、異なる力学が働いている可能性が高いと指摘している。すなわち、社会科学系では「指導機会仮説」を支持する結果が得られているが、その他の系統であれば、また、社会科学系にあっても入学難易度が異なれば、どのような結果が得られるのかは明らかでないのである。そこで本稿では、入学難易度によって、卒業率が必修科目の設定に与える影響にどのような違いが生じるのか、「障害除去仮説」と「指導機会仮説」を手掛かりに、系統の違いも考慮した上で明らかにしたいと考える。

2. 研究の方法

本研究で使用するデータセットの基盤は、教育ソリューション株式会社³⁾が販売する、全国の大学学科を網羅した電子データである。その中から、本研究が対象とした9系統に含まれる2,443学科を抽出し、学位カリキュラムごとにケースを作成するとともに、その必修単位数や必修科目名等に関する情報をデータ化していった。なお、本研究における「学位カリキュラム」(以下、カリキュラム)は、串本(2019)と同様、期待する学修成果と卒業要件(必修授業科目)を共有する範囲として定義される。したがって、ひとつの学科が複数の履修経路(専攻、コース等)を設定している場合、必修の条件が同じならばカリキュラムはひとつであり、異なるならば複数のカリキュラムが展開されていることになる。

本稿では、このうち文部科学省による学科系統分類表の「大分類」において主要なカリキュ

ラムを十分に含んでいると考えられる、人文科学系、社会科学系、理学系、工学系、農学系の5系統に限定して分析を行う。分析対象となるのは、2,045 学科 2,627 カリキュラムである⁴⁾。各系統の定義及び分析対象となる学科数・カリキュラム数の詳細は表1に示す通りである。

表1 各系統の定義及び分析対象となる学科・カリキュラム数

	定義	学科数	カリキュラム数
人文科学系	大分類「人文科学」のうち、「その他」を除いた3の中分類	385	516
社会科学系	大分類「社会科学」のうち、「その他」を除いた3の中分類	806	998
理学系	大分類「理学」のうち、「その他」を除いた5の中分類	173	190
工学系	大分類「工学」のうち、「その他」を除いた13の中分類	586	798
農学系	大分類「農学」のうち、「その他」を除いた8の中分類	95	124

さて本稿では、入学難易度による差異に着目するのだが、その指標とするのは、予備校、進学塾等が大学入試における合格可能性を示す値として用いている偏差値である。教育ソリューション株式会社が国内の大手といわれる予備校、進学塾等複数参考資料として作成した学科単位のデータに基づき、本稿では偏差値帯を、偏差値40未満の「低偏差値群」、偏差値40以上50未満の「中偏差値群」、偏差値50以上の「高偏差値群」の3群に分け、群間比較による検討を行う。各群の分析対象となるカリキュラムは表2に示す通りである。

これをみるとわかるように、この3群で分けると、理学系と農学系では「低偏差値群」のカリキュラム数が非常に少なくなってしまう。3群に分ける基準が適切でないように思われるかもしれないが、全体でみれば「低偏差値群」のカリキュラム数が占める割合はおおよそ3分の1(31.8%)である。この点に鑑みれば、3群に分ける基準が適切でないというよりは、理学系と農学系ではそもそも偏差値の低いカリキュラムが少ないという実態を反映した結果であるといえよう。以下では、こうしたカリキュラム数の偏りに十分留意した上で検討を行う。

表2 分析対象となるカリキュラム

全体		全体	低偏差値群	中偏差値群	高偏差値群
		2626	835 31.8%	1043 39.7%	748 28.5%
系 統	人文科学系	516	161 31.2%	228 44.2%	127 24.6%
	社会科学系	998	456 45.7%	342 34.3%	200 20.0%
	理学系	190	7 3.7%	53 27.9%	130 68.4%
	工学系	798	206 25.8%	353 44.2%	239 29.9%
	農学系	124	5 4.0%	67 54.0%	52 41.9%

注：上段は実数、下段は割合。

3. 偏差値帯別の必修単位数と卒業率

卒業率は必修科目の設定にどのような影響を与えるのだろうか。また、偏差値帯によってその影響のありようにどのような違いが生じるのだろうか。その検討に先立ち、ここでは偏差値帯によって必修単位数と卒業率がどの程度異なるのかを確認していきたい。

3-1. 偏差値帯別の必修単位数

偏差値帯によって必修単位数がどの程度異なるのかについては、葛城（2021）で明らかにしていることではあるが、ここで改めて確認しておきたい。必修単位数の基本統計量を系統別及び偏差値帯別に示したのが表3である。詳細は葛城（2021）を参照していただくことにして、ここでは要点だけを示したい。

まず、系統を問わずにいえば、必修単位数は偏差値帯によって大きな違いがあるわけではない。しかし、系統別にみると、必ずしも同様の傾向がみられるわけではない。社会科学系では、必修単位数は偏差値帯によって大きな違いがあり、偏差値が低い群ほどその値は高くなっている。これと比較的近い傾向を示しているのが人文科学系と農学系である。すなわち、必修単位数は偏差値帯によって少なからず違いがあり、相対的に偏差値が低い群（人文科学系では「低偏差値群」、農学系では「中偏差値群」）でその値は高くなっている。これらと異なる傾向を示しているのが残る工学系と理学系である。すなわち、工学系では、必修単位数は偏差値帯によって少なからず違いがあるものの、相対的に偏差値が低い群でその値が高くなっているというわけではなく、理学系では、そもそも偏差値帯によって少なからず違いがあるというわけでもない。

表3 偏差値帯別の必修単位数（系統別）

		全体	低偏差値群	中偏差値群	高偏差値群	
平均値	5系統全体	33.7%	33.6%	34.6%	32.8%	
	人文科学系	30.5%	33.8%	29.3%	28.7%	***
	社会科学系	23.8%	27.7%	22.6%	17.1%	***
	理学系	38.0%	—	37.2%	38.9%	
	工学系	46.1%	46.2%	47.4%	44.1%	*
	農学系	41.0%	—	44.9%	35.5%	**
中央値	5系統全体	32.3%	32.3%	33.9%	30.8%	
	人文科学系	29.0%	32.3%	28.4%	29.0%	
	社会科学系	21.9%	25.8%	21.0%	14.9%	
	理学系	39.3%	—	38.7%	40.3%	
	工学系	46.9%	46.0%	47.6%	47.2%	
	農学系	38.8%	—	43.5%	35.5%	
標準偏差	5系統全体	17.8%	17.5%	17.9%	18.1%	
	人文科学系	12.7%	14.8%	11.9%	10.4%	
	社会科学系	15.2%	16.1%	14.4%	11.5%	
	理学系	15.0%	—	13.0%	15.8%	
	工学系	16.1%	16.1%	15.6%	16.6%	
	農学系	17.2%	—	14.6%	19.5%	

注：***は $p < 0.001$ 、**は $p < 0.01$ 、*は $p < 0.05$ 。以下同様。

検定は3群以上の場合は一元配置分散分析、2群の場合はt検定による。表4も同様。

3-2. 偏差値帯別の卒業率

一方、偏差値帯によって卒業率はどの程度異なるのか。卒業率の基本統計量を系統別及び偏差値帯別に示したのが表4である。なお、卒業率については、『大学の實力 2019』（読売新聞教育ネットワーク事務局）のデータをもとにしている。ここで留意しておきたいのは、卒業率が不明である割合は、「中偏差値群」・「高偏差値群」では分析対象の5%ほどに留まっているのに対し、「低偏差値群」では20%を超えているという点である（特に社会科学系では30%近くにまで及んでいる）。この点に鑑みれば、「低偏差値群」（特に社会科学系）の卒業率の実態は表4に示す値よりもさらに低いものとなることが予想される。

まず、系統を問わずにいえば、卒業率は偏差値帯によって少なからず違いがあり、平均値でみれば、「低偏差値群」は「中偏差値群」・「高偏差値群」に比べ卒業率が低いことが確認できる。系統別にみると、農学系を除けば偏差値帯によって少なからず違いがあり、平均値でみれば、社会科学系や理学系、工学系では、相対的に偏差値が低い群（社会科学系と工学系では「低偏差値群」、理学系では「中偏差値群」）でその値が低くなっているのに対し、人文科学系では、「高偏差値群」でその値が低くなっていることも確認できる。ただし、中央値でみれば、人文科学系でも、「低偏差値群」でその値が低くなっていることには留意したい。

表4 偏差値帯別の卒業率（系統別）

		全体	低偏差値群	中偏差値群	高偏差値群	
平均値	5系統全体	80.5%	77.6%	81.9%	81.2%	***
	人文科学系	78.7%	78.6%	81.5%	74.0%	***
	社会科学系	80.6%	77.5%	83.3%	81.6%	***
	理学系	81.4%	—	79.4%	82.4%	***
	工学系	79.9%	77.0%	79.8%	82.4%	***
	農学系	89.2%	—	89.1%	89.8%	
中央値	5系統全体	81.3%	77.4%	81.8%	83.2%	
	人文科学系	81.4%	78.7%	83.2%	80.3%	
	社会科学系	81.6%	77.5%	83.6%	82.2%	
	理学系	81.4%	—	79.9%	83.9%	
	工学系	80.2%	77.0%	80.0%	82.7%	
	農学系	89.4%	—	89.7%	89.4%	
標準偏差	5系統全体	7.9%	7.2%	6.8%	9.2%	
	人文科学系	11.5%	7.7%	9.4%	16.0%	
	社会科学系	7.4%	7.4%	6.1%	7.2%	
	理学系	4.9%	—	4.3%	5.0%	
	工学系	5.2%	6.3%	4.4%	3.9%	
	農学系	3.5%	—	3.5%	3.3%	

さて、以上の結果を「有意な差」($p < 0.05$)という観点で整理したのが表5である。これをみると、必修単位数と卒業率のいずれについても、系統によって偏差値帯による違いのありようが大きく異なっていることが改めてわかるだろう。こうした偏差値帯による違いをふまえた上で、次節では、卒業率が必修単位数にどのような影響を与えるのか、また、偏差値帯によってその影響のありようによどのような違いが生じるのかを検討していこう。

表5 偏差値帯別の必修単位数率と卒業率

5 系統全体		必修単位数率	社会科学<人文科学<理学、農学<工学
		卒業率	人文科学、工学<社会科学、理学<農学
系統別	人文科学系	必修単位数率	高偏差値群、中偏差値群<低偏差値群
		卒業率	高偏差値群<低偏差値群<中偏差値群
	社会科学系	必修単位数率	高偏差値群<中偏差値群<低偏差値群
		卒業率	低偏差値群<高偏差値群<中偏差値群
	理学系	必修単位数率	—
		卒業率	中偏差値群<高偏差値群
	工学系	必修単位数率	高偏差値群<中偏差値群
		卒業率	低偏差値群<中偏差値群<高偏差値群
	農学系	必修単位数率	高偏差値群<中偏差値群
		卒業率	—

4. 卒業率が必修単位数率に与える影響

卒業率が必修単位数率にどのような影響を与えるのか、また、偏差値帯によってその影響のありようにどのような違いが生じるのかを検討すべく、以下では卒業率を独立変数、必修単位数率を従属変数とした偏差値帯別の重回帰分析を行う。なお、卒業率を独立変数として設定していることについては、因果関係が逆のように感じられるかもしれない。しかし、ある一定の卒業率を前提とした上でカリキュラムが検討されることは十分にあり得ると考え、卒業率を独立変数とすることとした。用いる独立変数は、卒業率に加え、統制変数としての設置年、偏差値、ST比であり、いずれの変数も実数である⁵⁾。なお、従属変数についてはカリキュラム単位であるのに対し、独立変数については、卒業率は学部単位、設置年、偏差値、ST比は学科単位であることに留意されたい。すなわち、この分析で明らかにできるのは、どのような学部あるいは学科のもとにあるカリキュラムは必修単位数率が高いのか（あるいは低いのか）ということである。

重回帰分析の結果を示したのが表6である（F値が有意でない場合は薄い網掛けをした上で、参考までに値を記載する。また、濃い網掛けはサンプルサイズの問題もあり、分析を行っていないことを意味する）。まず、全体の結果をみると、卒業率については興味深い傾向が確認できる。すなわち、「卒業率」は「高偏差値群」と「低偏差値群」で有意な影響を与えているのだが、前者では負の影響を与えているのに対し、後者では正の影響を与えているのである。このように、高い偏差値帯では、卒業率が高い学部のもとにあるカリキュラムほど必修単位数率は低くなるのに対し、低い偏差値帯では、卒業率が高い学部のもとにあるカリキュラムほど必修単位数率は高くなるという逆の傾向がみられるのである。仮説との関係でいえば、「障害除去仮説」を支持する結果は高い偏差値帯で、「指導機会仮説」を支持する結果は低い偏差値帯で得られたということである。

以上の結果は、異なる傾向を一緒にくたにしてみた場合であるが、系統別にみた場合でも同様の傾向は確認されるのだろうか。ここでまず確認しておきたいのは、社会科学系の「高偏差値群」と理学系及び農学系の「中偏差値群」でF値が有意でないという点である。す

表 6 必修単位率を従属変数とした重回帰分析（系統別）

	全体			人文科学系		
	低偏差値群	中偏差値群	高偏差値群	低偏差値群	中偏差値群	高偏差値群
設置年	-0.010	0.045	0.102 **	0.045	0.063	-0.097
偏差値	0.109 **	-0.061 *	-0.152 ***	-0.026	0.024	-0.222 *
ST比	-0.330 ***	-0.446 ***	-0.445 ***	-0.250 **	-0.117	0.104
卒業率	0.088 *	0.007	-0.084 *	-0.019	-0.129	-0.605 ***
調整済みR ²	0.124	0.206	0.227	0.047	0.030	0.184
F値	24.145 ***	64.518 ***	52.611 ***	2.714 *	2.738 *	8.098 ***

	社会科学系			理学系		
	低偏差値群	中偏差値群	高偏差値群	低偏差値群	中偏差値群	高偏差値群
設置年	0.131 *	0.117 *	0.145		-0.003	-0.064
偏差値	-0.146 **	-0.086	-0.076		0.163	0.122
ST比	-0.198 ***	-0.222 ***	-0.055		-0.147	-0.033
卒業率	0.161 **	0.240 ***	0.088		0.232	-0.284 **
調整済みR ²	0.151	0.171	0.026		0.025	0.047
F値	15.769 ***	17.402 ***	2.259		1.330	2.532 *

	工学系			農学系		
	低偏差値群	中偏差値群	高偏差値群	低偏差値群	中偏差値群	高偏差値群
設置年	-0.125	-0.071	0.110		0.202	0.159
偏差値	0.195 **	-0.119	-0.193 *		-0.281	-0.552 ***
ST比	-0.258 ***	-0.227 ***	-0.289 **		0.042	-0.113
卒業率	0.317 ***	0.167 **	-0.173 *		0.239	0.399 **
調整済みR ²	0.202	0.043	0.077		0.023	0.346
F値	11.954 ***	4.618 ***	5.405 ***		1.364	7.351 ***

注：値は標準化偏回帰係数。

なわち、必修単位率の違いは卒業率をはじめとする、本稿で設定した独立変数によって一定程度説明することができるだろうと考える本稿の分析モデルは、社会科学系の高い偏差値帯のカリキュラムと理学系及び農学系の中程度の偏差値帯のカリキュラムには妥当でなかったということである。このことをふまえた上で、これら以外の結果をみていこう。

卒業率の影響について、先述の全体の結果と比較的近い傾向を示しているのが、工学系と理学系である。すなわち、工学系では、「高偏差値群」で有意な負の影響を与えているのに対し、「低偏差値群」だけでなく「中偏差値群」でも有意な正の影響を与えており、理学系では、「高偏差値群」で有意な負の影響を与えている（「低偏差値群」は分析対象外）。一方、全体の結果とやや異なる傾向を示しているのが、人文科学系と社会科学系である。人文科学系では、「高偏差値群」で有意な負の影響を与えているのに対し、「低偏差値群」では有意な（正の）影響を与えておらず、社会科学系では、「低偏差値群」だけでなく「中偏差値群」でも有意な正の影響を与えているのに対し、「高偏差値群」では有意な（負の）影響を与えていない。残る農学系にいたっては、全体の結果と大きく異なる傾向を示しており、「高偏差値群」で有意な正の影響を与えている。

このように、人文科学系、理学系、工学系では高い偏差値帯で、卒業率が高い学部のもとにあるカリキュラムほど必修単位率は低くなるのに対し、社会科学系や工学系では中程

度以下の偏差値帯、農学系では高い偏差値帯で、卒業率が高い学部のもとにあるカリキュラムほど必修単位数が高くなるということである。仮説との関係でいえば、「障害除去仮説」を支持する結果が得られたのは、人文科学系、理学系、工学系の高い偏差値帯のみということであり、「指導機会仮説」を支持する結果が得られたのは、社会科学系と工学系の中程度以下の偏差値帯、そして農学系の高い偏差値帯のみということである。すなわち、その他の系統及び偏差値帯では、これらの仮説を支持する結果は得られなかったということである。

5. まとめと考察

前節の重回帰分析の結果を、「障害除去仮説」及び「指導機会仮説」のそれぞれについて、支持する結果が得られたか否かという観点で整理したのが表7である。仮説を支持する結果が得られた部分には「○」を付している。なお、網掛け部分には、偏差値帯に分けずに当該系統全体で同様の分析を行った結果を示している。これをみると、偏差値帯と仮説との間には一定の規則性がうかがえる。すなわち、「障害除去仮説」を支持する結果が得られているのは、人文科学系、理学系、工学系の、いずれも高い偏差値帯であるのに対し、「指導機会仮説」を支持する結果が得られているのは、社会科学系、工学系の、いずれも中程度以下の偏差値帯なのである（農学系については後述する）。そこで最後に、なぜこうした規則性がみられるのかについて考察してみたい。

その理由として考えられるのは、「障害除去仮説」が想定する影響と「指導機会仮説」が想定する影響が相殺されている可能性である。修業年限内での卒業が「常識」となっている日本の大学では、そもそも「障害除去仮説」との親和性の高い文化が形成されていたのではないかと考えられる。すなわち、卒業の足かせ（障害）となるであろう必修科目を極力設定しないようにする力学が働きやすい文化が形成されていたということである。しかし、大学進学率の高まりによって、手厚い指導を行わなければ（修業年限内か否かにかかわらず）卒業が困難になる、いわゆる「手のかかる学生」の存在が無視できなくなったこ

表7 仮説との対応一覧

	全体				人文科学系			
	低	中	高	全体	低	中	高	全体
障害除去仮説			○				○	○
指導機会仮説	○			○				

	社会科学系				理学系			
	低	中	高	全体	低	中	高	全体
障害除去仮説					—		○	○
指導機会仮説	○	○		○	—			

	工学系				農学系			
	低	中	高	全体	低	中	高	全体
障害除去仮説			○		—			
指導機会仮説	○	○		○	—		○	○

とに伴い、「指導機会仮説」との親和性が高い文化が流入してきた。すなわち、卒業のために必要な手厚い指導を行う機会として、必修科目を極力設定しようとする力学が働きやすい文化が流入してきたということである。その結果、そもそも支配的であった「障害除去仮説」が想定する影響が弱まったり、「指導機会仮説」が想定する影響が顕在化したりしているものと考えられる。すなわち、「障害除去仮説」が想定する影響が弱まってもなお、(辛うじて)高い偏差値帯で残っているのが人文科学系、理学系、工学系であるのに対し、そこですら消えてしまったのが社会科学系であり、「指導機会仮説」が想定する影響が顕在化するまでに至っているのが、社会科学系と工学系の中程度以下の偏差値帯なのではないか。

系統によってなぜこのような違いが生じるのか、非常に興味深いところではあるが、現段階では妥当な解釈を見出せていない。また、先述の解釈でいえば、農学系の高い偏差値帯には「障害除去仮説」が当てはまるはずであるが、実際に当てはまるのは「指導機会仮説」である。農学系については、卒業率がその他4系統に比べて有意に高い(表5参照)ことから、また別の要因が影響しているものと考えられるが、こちらについても現段階では妥当な解釈を見出せていない。各系統の事情に詳しい方へのインタビュー等を行うことで、これらの点についての「新たな解釈」を見出すことを今後の課題としたいと考える。

付記

本稿は、JSPS 科研費 18H01025 「学士課程カリキュラムの共通性に関する実証分析」(基盤研究(B) 研究代表者: 串本剛) の助成を受けたものである。

注

- 1) 葛城(2021)が対象としている系統は、人文科学系、社会科学系、理学系、工学系、農学系の5系統であり、そもそも「低偏差値群」が非常に少なく分析から除外されている理学系と農学系を除くと、同様の傾向がみられないのは工学系のみである。
- 2) この他にも、葛城・宇田(2020)は、卒業要件単位数であればまだしも、必修単位数についての回答は基本的に煩雑であり、特に必修単位数が専攻やコース等で異なるような場合にはその度合いはより高まるため、結果として回答が得られない可能性が高いことや、分析単位がいわゆる「大分類」(例えば「社会科学系」等)に基づいていることが多いため、その下位分類のボリュームが大きな専門領域では、そうした「大分類」に基づく大括りの分析だと実態を見誤る可能性が高いことを挙げている。
- 3) 教育に有用な情報の基礎となる「全国学校データ」の専門の販売会社。会社の詳細及びデータの収集方法等については、以下のURLを参照されたい。
(<https://kyouikusolution.co.jp/company.php>)
- 4) 卒業要件単位数や必修単位数が不明なカリキュラムは分析対象から除外している。
- 5) 設置年については、『全国大学一覧(平成30年度)』のデータをもととしている。また、ST比については、各大学の公開情報にある学生定員と専任教員数から算出している。

2018年度の数値を基本としたが、当該年度の情報が不明で定員変更等が行われていない場合は、2019年度もしくは2020年度の数値を用いている。算出単位は学科を基本とし、公開情報の形態によりその算出が難しい場合は、学部単位の数値を用いている。

参考文献

- 串本剛（2019）「現代日本における学士課程カリキュラムの共通性—プログラムレベル指標としての必修単位数」『日本高等教育学会第22回大会発表要旨集録』160-161頁。
- 串本剛編（2021）『学士課程教育のカリキュラム研究』東北大学出版会。
- 葛城浩一（2013）「ボーダーフリー大学における学士課程教育の質保証—一定の学修時間を担保する質保証の枠組みに着目して」『KSU 高等教育研究』第2号、21-32頁。
- 葛城浩一（2021）「入学難易度別の分析—主要5系統を対象に」串本剛編『学士課程教育のカリキュラム研究』東北大学出版会、181-197頁。
- 葛城浩一・宇田響（2020）「現代日本における学士課程カリキュラムの共通性—社会科学系に着目して」『東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要』第6号、113-126頁。